

大学生の怒り感情とそれになう行動について

－対人場面における怒り感情の表出とパーソナリティ特性との関連から－

趙 愛 蓮

1. 問題と目的

怒り感情は、所与の社会的環境の影響を受けて喚起される感情であり（阿部・高木、2005）、喚起された怒り感情をどのように制御するかということは、その後の対人関係を左右するという意味で適応に対して一定の役割を果たしている（吉田・高井、2008）。

そこで、本研究は、大学生を対象に、怒り感情の表出について、場面想定法を用いて対人場面および個人のパーソナリティ特性との関連から検討する。

2. 方法

調査用紙は、フェイスシート、怒り表出尺度、パーソナリティ特性尺度、情動性尺度の4部から構成されている。怒り表出尺度は、Spielberger（1988）によって作成された、State-Trait Anger Expression Inventory（STAXI）を重久が日本語に翻訳した、STAXI 日本語版の中から、怒り表出尺度（AX）を抜き出し、修正した20項目を使用した。パーソナリティ特性尺度は、5因子モデルの検査FFPQ（1998）から、対人関係に関連する内向性－外向性の特性と、統制性－自然性の特性を抜き出した60項目を、本研究ではパーソナリティ特性尺度とした。さらに、情動性尺度は、5因子モデルの検査FFPQ（1998）の中の、非情動性－情動性の特性30項目を使用した。

3. 結果・考察

本研究によって、対人場面において対象となる人物の親密度が怒りの表出には影響していることが明らかになった。そして対人場面で生起する怒り感情と、自分自身に対して生起する怒り感情には、怒りの質的な違いがあることが明らかになった。また、対人場面における怒りの表出には、「外向性」や「統制性」といった個人のパーソナリティ特性が関連しており、怒りの抑制には情動の安定性が関連していることがわかった。

さらに、本研究では、各場面ごとの怒りの認知度がパーソナリティ傾向とは関連がなく、情動性に関連していることが明らかになり、怒りの認知度が低いと怒りの制御、怒りの認知度が高いと怒りの表出に繋がることが明らかになった。

これからの課題としては、5因子の他の特性と対人場面の怒りの表出との関連も検討する必要があると考える。対人場面についても、人と人との関係性は多様であり、場所や立場、年齢によって在り方が変化するので、あらゆる場面において検討されるのが望ましい。